

## 戦記

一父と母に一

### 終章

松崎 一平

ことのほか冷え込みが厳しい朝、いつもの時間に寢床から起き出し、冷たい水で顔を洗う。何時までどこそこに行かなければならないという生活から、いくさによって否応なく引き離され、ゆったりと朝を過ごすようになってずいぶん経つ。手を動かすリズムもいつのまにかゆっくりとなったふうで、石鹸を十分に泡立てて、ていねいに顔を洗うと、冷たさがしだいに清々しくなる。それから、妻が朝食の支度をするのを待ちながら、電気ポットでお湯を沸かして紅茶をいれる。好きな銘柄のものは手に入らなくなったが、水が冷たくなると、おいしくはいる気がした。今朝はとくに寒いね、もう晩秋ではなく、初冬とっていいくらいだね、と妻にいう。そうですね、と妻。いくさが始まってからも変わらぬ、妻の穏やかなふるまいとことばはなによりもありがたい。

長らく新聞は配達されていないし、夏からはテレビをつけても、まったく受信しなくなっている。ネットワークもつながらなくなって久しい。桜のころには身近なところに、いくさを感じさせるできごとがなくはなかったが、春の盛りのころになると見ることも聞くこともなくなってしまった。物不足が絶望的に深刻になることはなく、けっきょく桜のころが最悪で、住民の努力もあって、困らないくらいに回復していた。食べものについても、庭で始めた野菜作りや知人友人たちとの助け合いによって、つつましくはあるが食事を楽しめる程度に手に入る。前世紀の後半から激しくなった地球の温暖化は、「自然を回復せよ！」運動もその一貫の国際的な努力もあって、ある程度抑えられているものの、なおゆるやかに進みつけている。そのせいかわどく暑かった夏も、窓の外に糸瓜を茂らせて日陰をつくる、打ち水をするなどして、なんとか乗り切った。望まないのに、もてあますほどの暇にめぐまれた、禁欲的な生活。毎日続けている『失樂園』を読むペースは、夏くらいからしだいに速くなり、いつのまにかという感じで、十二巻の終わり近くまで進んだ。ミカエルの救済の予言に一心不乱に耳を傾けるアダムとイーヴの姿に静かな感動を覚えながら、読み始めたころと同じようなペースで、あえてゆっくりと読んでいる。終わることを惜しむ気持ちがあるのだ。それにしても、このような暮らしは、原罪まえの樂園のそれに、なにか深いところで似ている気がしてならない。

目玉焼きと手作りのパン、それに、冷蔵庫にとっておいた、庭で収穫した仕舞いの秋茄子のソテーが食卓に並ぶと、娘も起き出してきて朝食が始まる。茄子はいつ食べてもおいしいね、と娘がいい、妻が、そうね、よく生ったから助かったね、と返事をする。いつも繰り返される会話だ。卵は、十分というわけにはいかないが、土地の養鶏業者からじかに手に入る。

今日は午後、友だちと会って、おしゃべりをします、話題は最近読んだ本について、と娘。おまえはどんな本を読んだの、とたずねると、ル＝グウィン『ラウィーニア』、おばあちゃんが読んでいた本、と答える。とてもおもしろかったわ、英雄アエネーアスもラウィーニアにはふつうの夫で、そう、『ゲド戦記』のテナーに対するゲドのように。そのことばに娘の成長を感じて、いくさが始まってからの時間の経過を実感する。二杯目の紅茶を飲み干し、いつものように、自分のマグカップや皿を洗おうと立つと、とつぜんチャイムが鳴った。この時間にはめったにないことなのでとても驚き、自分でも予想外の大声で、はい、と返事をしてしまう。

玄関のドアを開けると、春、芹摘みに行ったときのことを話してくれた学生が、昂揚した表情で立っていた。わたしの顔を見ると、テレビが回復しています、と早口でいう。えっ、とわたしはいい、学生を誘って、二人で居間にいき、食事のあと片付けをしている妻と娘に、テレビが回復しているそうだと声をかけながら、リモコンを探しだして、テレビをつける。ちょうど始まりのところらしく、国会議事堂の正面から全景の写真が画面一杯に映し出されている。壮年の男性アナウンサーらしい落ち着いた声で、「国民のみなさま、首都圏の治安は回復されました。過日、政治の全権を掌握する国家評議会が開催され、暫定的な統治体制が樹立されました」と説明があり、そここのところで、会議場に据えられた不自然なくらい巨大な円卓に迷彩色の軍服を着た三〇人くらいが座っている光景が映し出される。「国家評議会は、全国の治安をできるだけ速やかに回復する方策の検討を始めました。間もなく全国で秩序が回復されますので、みなさまは安心してください」と、ナレーションは結ばれる。そして、一瞬、円卓の中央に、巨大な国旗を背にひとりだけ黒い背広を着て座るS氏の、端正だが、どこか傲岸な表情が映し出された。そこで映像は始めに戻る。こうして、五分ほどの映像とナレーションが延々と繰り返される。わたしたちはただ驚くばかりだった。学生によると、テレビがなにも映さなくなっても、ひょっとして回復してはいないかと、朝起きるとスイッチを入れることが習慣になっているので、今朝も、どうせ映らないだろうと思いつながらつけてみた。そうしたら映っていたので、とにかく驚いて、朝食をさっさとすませて、自転車で駆けつけたとのこと。空気が冷たくて耳が痛くなりました、と、あいかかわらず昂揚した表情でいう。

友人たちのところを回って、テレビが回復していること伝えます、と聞いて学生が帰ったあと、テレビの画面はいつまでも同じ映像を流しつづけて、いっこうに変わらないので、わたしは自分の部屋で、朝の日課の『失樂園』を読み始めた。テレビが伝えていたように、ほんとうにS氏の側が勝利を手にしたのなら、国のかたちも空気も、いくさのまえと劇的に変わるだろう。そう考えると、暗い不安に襲われた。

戦いがどのようにおこなわれたのか、少しもわからない奇妙ないくさ。軍事力の増強をめざしながらもその使用に抑制的だった「新しい政府」が、いわばたがをはずして、優勢な軍事力を行使し始めたのなら、その勝利は当然だろう。だが、どのような政治を実行するのか、その理念についてはまったく情報はない。実権を掌握しているらしいS氏の立場や人柄

は、もともと支持しがたいものだったし、信頼するに足ると判断できるような情報は皆無だ。いくさは、S氏の思想信条を増幅させそうだが、その逆ではあるまい。ならば、なにか深刻な国際的な軋轢をまねく方向に、国政の舵を切るかもしれない。それに、この土地はS家の地盤でもある。そのことが、こののち暮らしにくさにつながるかもしれない。昂じる不安をもちあましながら、ミルトンの、読まれなくなって久しい叙事詩に向かう、——騎士物語に熱中したラ・マンチャの男のように。

ミルトンは革命の時代に、創世記冒頭三章の世界の創造と人間の墮罪の物語を、人間への深い愛に根ざす理知と想像力をもってふくらませて叙事詩としてうたい、人間の創造に先立っておこなわれた、二軍に分かれた天使たちの戦い、神に従う善き天使たちとおのれに従う悪い天使（悪魔）たちとの戦いを語る。地獄に墮ちた敗者の頭領であるサタンの誘惑によって、神の戒めに背き、いわゆる原罪を犯したアダムとイーヴの愚かさとけなげさを語る。二人は、おのれたちの罪をこころから悔いる。かくて、楽園から追放されるよう神によって定められたアダムとイーヴのもとに大天使ミカエルが派遣され、アダムとイーヴから始まる人類の荒波騒ぐ未来と、イエスによる贖罪を核とする神の救済の計画とを、イーヴがあずまや（bower、平井正穂訳は「四阿」とする）に眠っているあいだに、アダムに予言する。同様のことが、イーヴには神から夢で知らされる。つまりは、希望が、ことばによる啓示と黙示とによって伝えられる。ミルトンはそのようにうたう。そのあと、楽園を去ることをためらうアダムとイーヴを、ミカエルは両手でかき抱くように楽園の東の門に導き、はからずも墮罪の場となった住みなれた楽園をあとにする。原文の六四一行以下を、平井訳では、訳の六四〇行目に繰り入れて、つぎのように訳す。

・・・・・・・・・・。彼らは、ふりかえり、ほんの今先まで  
自分たち二人の幸福な住処の地であった楽園の東にあたる  
あたりをじっと見つめた。その一帯の上方では、神のあの焔の  
剣がふられており、門には天使たちの恐ろしい顔や燃えさかる  
武器の類が、みちみちていた。彼らの眼からはおのずから  
涙があふれ落ちた。しかし、すぐにそれを拭った。  
世界が、——そうだ、安住の地を求め選ぶべき世界が、今や  
彼らの眼前に広々と横たわっていた。そして、摂理が彼らの  
導き手であった。二人は手に手をとって、漂泊の足どりも  
緩やかに、エデンを通過して二人だけの寂しい路を辿っていった。

ヒューズのテキストには、最後に、*The End*とイタリック体で書かれている（それをみるたびに、わたしはこどものころに見たハリウッド映画のラスト・シーンを思い出す）。これが、長く読んできた『失楽園』全一二巻の終わりだった。こころに深く染みこむ光景だな、とつくづく思った。明るい楽園のそこだけ暮れはじめたあたりを、長い影を落としながら、なに

かたよりない足どりで、未知の世界にむけて歩を進めるアダムとイーヴの姿は、いくさのなかを手探りで暮らしてきた自分たちのそれと重なりもした。たしかに、いくさは終わったようだ。だが、わたしは、少しも安心できなかつた。よろこびは感じなかつた。摂理が導いてくれるわけでもないし、救済の計画は、むしろもうわたしたちのものではない。いま、いくさは、『失樂園』の、人類の創造に先行しておこなわれた神話的なそれのように、大きな物語をもたらすことはなかつた。わたしたちはいくさを実感しながらも、そのそとにいて、なにがしか不安を感じてはいたものの、あいかわらずいくさ以前となんらかつながっている日常は、原罪以前のエデンの暮らしと重ねうるほどに平穏だった。いくさはいつか終わり暮らしはもとに戻るだろうという希望が、これまではたしかにあった。しかし、いくさが終わったかもしれないいま、どのような世界がわたしたちを待っているのか、久しぶりに見たテレビの画面を考えると、むしろ漠とした不安を感じるのだ。見慣れない会議の、迷彩色の軍服を身につけた人間たちの醸し出す、傲岸だがどこかこっけいなフリーズしたような表情や情景とともに、いくさのまえの生活が回復する希望はすっかり失せてしまった。わたしたち自身が、ミルトンがうたっているように、世界を選ばなければならないというのだろうか。希望をもたずに、いったい選べるものなのか？ 信仰はないのだ。ならば、わたしたちは、摂理の光も救済の灯も照らさない、暗い影のなかを歩むことになりはしまいか？ 妻と娘のいつもの朗らかな表情を思いうかべて、わたしは呆然としていた。